

宮崎学園短期大学、十一年目の再挑戦

「低満足層へのアプローチ」

塚本 泰造
(宮崎学園短期大学 F D推進委員長 准教授)

一 はじめに

宮崎学園短期大学のFD活動は、今年で一一年目を迎えます。入学者の出身地と就職先のほとんどが宮崎県内ですから、私たちは地域密着型の短大として「日本一の地方短大を目指す」ことをスローガンに取り組んできました。その「日本一」というのは、学生を伸ばすことにおいてそうありたいという意味です。

幸いなことに、私たちの取組は初年度(平成一五年度)の特色GPに採択され、各種新聞にも取り上げられました。その後、さまざまな改善を加え、全学的な取組としての下

地ができあがり、今年度は学生支援GP・教育GPに採択されるに至りました。

しかしながら、平成一〇年から始まった私たちのFD活動は、順風満帆だったわけではありません。入学者減の冬の時代を迎えて、さて私たちの短大はどうあるべきか、自問自答を繰り返して、いわば「艱難汝を玉にす」からの発想で、おのずと出来上がってきた行動様式でもあります。

ここでは

①現在のFD活動フローとその経緯

②学生たちへのアプローチの推移から見た今後の方向性の二点を中心に、私たちの短大のFD活動を紹介します。

二 私たちの短大のFD活動フロー

(一) 公開/共有↓検証

私たちの短大のFD活動フローは、一言で言えば、公開/共有↓その検証という枠組みで、一二の取組みを教員全員が行っているものです(図1参照)。

まず年度当初の四月から、月ごとにFD活動の重点目標(①)を拡大教授会の場で発表します。これは授業面だけでなく学生とのコミュニケーション面も含んだ二本立てで行っています。また全教員が今年度の改善目標を三項目立て(②)学生にも公開します。そして月一回のペースで、全員が集うミーティング(③)を行い、ニュースも発行します(④)。

授業が本格的に動き始める五月から、公開授業と授業参観、授業研究会も始動します(⑤⑥)。授業面のみならず、学生支援の時間(⑦)や気になる学生たち等についての情報交換の場(⑧)もこの頃から本格的に動きます。

こうして月一回のペースで全員が集い、年に一回は全員授業を公開し、年に五回は授業を参観します。また授業場面のみならず、臍や悩みの相談に関わる場面もあります。

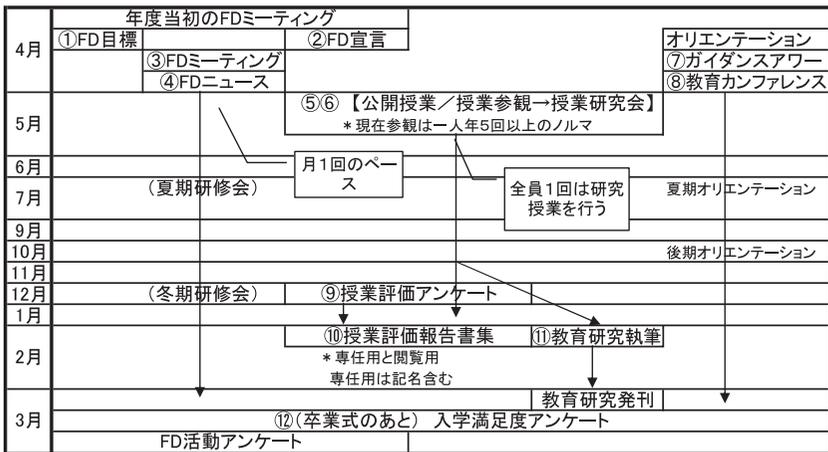


図1 宮崎学園短大のFD活動フロー(2008年現在)

で、普段から学生たちとのコミュニケーションを意識して過ごすことにしています。端的な例として、たとえば、入学当初のオリエンテーション時に、学生たちの名前と顔を早く一致させられるように、FD推進委員は学生の写真を撮って、名前と照らし合わせたクラス写真を全教員に配布しています。

FD活動は授業担当者の改善意欲を維持・向上させるのが本来の働きですから、授業参観においてはただ授業を観た／観られたにとどまることなく、意見を交換し合う場を設けています。さらに、参観のポイントがわかるように、公開授業の担当者はシラバスと授業の展開案を事前に参観者に配ることにしています。二〇〇七年度からは、自分が改善したい授業テーマ(グループ学習の導入・発問の仕方・視覚資料の活用など)に沿って集まったユニット単位で活動しはじめました。

さて、一二月からは検証の季節となります。自分たちの授業改善が果たしてどれだけのものではあったか、学生からの評価(⑨)と授業参観・授業研究会からの評価や意見を受けとめて、各自報告書(⑩)を作成します。また、私たちの短期大学の教育改善についての研究成果を、全員が『教育研究』(⑪)に執筆して報告します。

平成一二年、学生を伸ばすことにおいて日本一を目指すのであれば、顧客満足度(CS)の視点を導入することが大切であると考え、具体的に、卒業時の入学満足度 九〇%を数値目標として設定しました。

平成一二年、学生を伸ばすことにおいて日本一を目指すのであれば、顧客満足度(CS)の視点を導入することが大切であると考え、具体的に、卒業時の入学満足度 九〇%を数値目標として設定しました。数値化すればよいというものではありません。大切なのは目標の質でした。全学一斉に行動するということから、単なるノルマをこえたもの、つまり、させられ感を抱きながら行動することがないようなものが求められていました。幸いなことに、学生に笑顔で卒業してもらいたい、ここで過ごしてよかったと思っしてほしいという夢や願いが全教員に共有されていました。FDが謳われる以前から、『ここに来るはずじゃなかった』、あるいは、『入学したことはしたけれど……』、そんな思いや態度を表現する学生たちにも、向かい合ってきた歴史が教職員集団に伝承されていたからです。夢や願いを数値にも表現した次第です。また、「二〇〇〇年FD宣言」を全教員で審議採択し、学外にも公表しました。そこには、

二一世紀を迎え、厳しい少子化の試練の中で、本学がこれまで以上に存在意義を持ち続けるためには、本学

この『教育研究』は学究畑出身の方でも現場出身の方でも、本学の教育というお互いが共有している場を対象として研究したもので、分量も原稿用紙一〇枚ほどにおさめたものです。三年間途絶えることなく全教員執筆が続いています。

そして、学生たちが卒業を迎える三月には、私たちの活動も最終的に評価されることになります。その最終検証が卒業式の後に行う、入学満足度アンケートです(⑫)。学生たちに、この短期大学に入学して、結局、自分にとってよかったかどうかを尋ねるわけですが、学生たちは既に必要な単位を全てとって卒業している状態なので、その評価には率直でシビアなものであると言えるでしょう。あしかけ一〇年ほどの試行錯誤から、ここで示したように、全教員によるFD活動という行動様式ができあがっていったのです。

(一)顧客満足度と「二〇〇〇年FD宣言」
こうした枠組みを形成するターニング・ポイントとなつたのは、平成一二年です。

それまでは自発性・自主性をもとにした、教員による、一種部活的な活動の面が強かったのですが、はたしてどの

に關係するすべての高校に、本学が有している数多くの特色、魅力、意気込み等々を、迫力を持って発信し、入学者すべてに深い充実感、満足感を与える教育を実現しなければならぬ。これは本学の使命であり、また、ここに集う教職員一人ひとりの願いでもある。と謳われています。

一言で言えば、私たちの短期大学は、「教育に生きる」マニフェストを公表したわけです。教育への労力を惜しまないこと、その労力が効果を生んでいるかどうかきちんと確かめることを柱として、統一した目標でFD活動が再編されました。

検証初年度の学生の満足度は八〇%にわずかに満たない数値でしたが、ここ五年の推移は表1に示すとおりです。

常に右肩上がりの道ではありませんでしたが、平成一九年(二〇〇七)三月に宿願であった入学満足度九〇%を達成することができました。FD活動九年目の成果でした。

表1 入学満足度(%)

2004年3月	2005年3月	2006年3月	2007年3月	2008年3月
83.5	88.3	87.9	90.6	88.3

三、私たちのFDの向かう方向性／低満足層へのアプローチを

高い満足度を得た要因は、具体的には低満足層の学生たちが減ったことでした。ここ三年の、入学満足度七〇％以下の学生数の推移を示します。

平成一八年三月 六二人
平成一九年三月 四一人
平成二〇年三月 四八人

以前よりほんの数％の学生たちに気づき、関わることできた、この成果が宿願達成にもつながりました。

現在、私たちのFD活動は低満足層をいかに減らすかに焦点をあてつつあります。たとえば、月ごとのFD目標がその流れを端的に示しています(表2)。おおよそ、年度当初からの信頼関係作り ↓ 徐々に気になる学生へのアプローチ

という流れに固まってきたところでしょうか。FD活動を授業改善に絞らただけでは、学生たちが期待するものに対して、不十分なのではないかという問いかけが、私たちの行動原理であり、一二の活動を支えるものとなっています。

さて、教職員の教育にかける行動面での下地は固まっているといえるでしょう。しかし、学生たちが自発的に動く下地作りがなされているか？ 短期大学では二年間という制限のなかで、ある水準まで学生たちが成長していきたくはありません。

教師からの働きかけだけではなく、学生たちが独り立ちしていくこと、言い換えれば、学生たちからの働きかけも生み出せるようなあり方が求められています。現在、さらに次の段階へ挑戦するべく、学生支援の面から、学生生活のスキル向上、さらには質問する力の向上を目指すプログラムの開発に取り組んでいるところです。

注1 二〇〇八年度より宮崎学園短期大学と改称しました。
注2 二〇〇七年度よりシラバスの授業の目標は行動目標として記すことになりました。
注3 入学満足度だけでなく、授業について・先生との出会いについて・自分の成長など他に五項目尋ねています。その数値はホームページに公開しています。

表2 FD目標 (平成18年度)

	学生とのコミュニケーション目標	授業での目標
4月	学生の顔と名前を100人覚えよう	教室ルールを確認しよう
5月	100人の学生に声をかけよう	学生の良いところをほめよう
6月	元気のない学生に、教職員それぞれのあたたかさで、心配りをしてみよう	有形無形の学生の願いを受けとめ、その願いを授業充実に生かしてみよう
7月	学生が有意義な夏季休業を送れるよう、積極的に助言しよう	指導と評価の一体化に努めよう
9月	新鮮な感動を多くの学生と共有しよう	学生を励ませるような評価方法の工夫をしよう
10月	笑顔のあいさつに、あたたかい一言を添えよう	FD宣言達成にむけて、具体的に取り組もう
11月	礼節を話題にしよう	私の推薦図書を紹介しよう
12月	積極的に学生に話しかけ、学生の悩みに耳を傾けよう	学生の実態を把握し、学習意欲の向上に結びつく授業展開を工夫しよう
1月	元気よく笑顔で新年の挨拶を届けよう	シラバスの再確認を行い次年度に繋げよう。
2月	卒業生の新たな出発にエールを送ろう	学生の意欲をより一層引き出すような授業の準備をしよう
3月	心を込めて卒業生を送ろう	授業評価をもとに、次年度のシラバスを見直そう